

コンセプト

ガルニエ・マルク

このオルガンの製作の企画にあたっては二つの目的、宗教と文化がその基本にあった。福岡女学院のような礼拝堂においては音響が最も重要なのは明白である。しかしながら、生徒や学生たちが日々参集する礼拝のための音響（特に歌をガイドするための）の選択肢はかなり限られている。

第二段階としては、音楽とオルガンのそれぞれのコンセプトを正しく調和させ、ヨーロッパの文化遺産であるオルガンの様式を一つに集約することである。これを実現するために私はオルガン製作者トービアス・ハインリッヒ・ゴットフリート・トローストがバッハの時代に建造した中部ドイツ複数のオルガンに着目した。

私は、鈴木雅明さん、横田宗隆さんと共にチューリングゲンで徹底した視察調査を行った後、彼らの適切な助言や意見を参考にして、このオルガン建造のコンセプトを固めた。

音響のコンセプト

ドイツの作曲家たちの作品、とりわけJ・S・バッハの作品を多く演奏することから、オルガンの音響が礼拝堂固有の音響に完全に一体化するように特別な注意を払った。それらの理由から楽音の調整はすべて現場で行った。これによって全パイプの効率性と音楽性を極限まで高めることができた。私の着想がひらめいたのは、トローストの数々のオルガンに見られる建造上の重要な要素と、そのきわだった特徴、とりわけ全てのミクスチュア（複合的な音列によるストップ）における3度管の存在である。その結果プレーヌム（最も輝かしい響きのストップの組み合わせ）には極めて独特な色彩を得ることが出来た。しかし、もし別なタイプの音質を望むなら、3度管なしの古典プレーヌムに変える装置を設置することも可能である。ペダル鍵盤のストップの組み合わせに関しては、2個の継ぎ手によってペダルでそれを奏することも出来る。しかし、これは独立し、手動による音栓から分離された設計である。

音響におけるもう一つのコンセプトは、ガンバ（音栓？）と呼ばれるヴィオラ・ダ・ガンバ 8'、ヴィオレッタ 4'、ヴィオロンバス 16'、そしてトラヴェルソ 4'（数字はパイプの長さを表す）のような歌口の狭いストップ（ストリング系）である。当時製造されたこの種のパイプの新しい音質には既にオルガン製作における初期ロマン派への軌道を見ることが出来る。

技術のコンセプト

このオルガンには、ラングバーデンに現存するオルガン（1650年建造）から着想した北ドイツ型バネ方式スプリングチェストの6つの風箱がある。このタイプの風箱を取り入れた理由は、北ドイツの厳しい気候と同じように湿気と乾燥とが極端に繰り返される日本の気候に適応できるその堅牢性と耐久性にある。

音の連結機構は、長く繊細な貫板と、同じく木で出来た差し金によって実現させた。レジスターの引出し装置も同じく機械式で、木と鉄を使った伝統工法で作られている。

送風装置は、1個の電気式送風機と3個の圧力制御装置（2個の手鍵盤とペダル鍵盤に供給する）とで構成されている。

パイプは一部分は木製であるが、大半の部分は鉛と錫の合金である。またいくつかのパイプには堅さを与えるために槌で鍛えた金属を用いた。

美の形態

オルガン外装箱には無垢の太い木材を使用した。その際、前三面の見える部分にはフランスのオーク材、背後の部分にはスイス国境近くのジュラ台地に生育するロイヤル・トウヒを用いた。これらの高級木材を用いるには、家具師の伝統的な技術と、食器棚を製作する伝統的な技法とが重要になる。下部の演奏台を含む部分には第二鍵盤の音響装置がある。オーク材の彫刻が施された六つの明るく澄んだ音の部分があるのはこの理由による。正面のパイプの上に置かれた彫刻は、金箔細工が施された金色の菩提樹である。オルガンの概観に関しては、礼拝堂の内装とは距離を置くようにし、コンセプトとしたバッハの時代に建造された様々なオルガンとの美的な繋がりを追求した。装飾は当時のオルガンほど豊かでないとはいえ、外装箱は18世紀のヨーロッパで作られた簡素な美の伝統を受け継いでいる。

結び

徳永院長、園田局長、高島氏をはじめ、私たちが非常に歓迎していただき、滞在中の生活を心地よく整えて下さった多くの方々に心からの感謝の意を表したい。

終わりに、若い生徒と学生がこのオルガンが伝えるべき音楽文化のメッセージを十分に受け止め、オルガンのために書かれた500年間の見事な音楽を未来へと引き継ぎ、美德によって日々の礼拝が導かれることを祈念する。